

ISBN 978-4-903875-24-8

*Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series 21*

ユーラシア諸言語の動態 III 一言語の多様性と類型と混成言語—  
ユーラシア言語研究コンソーシアム 2019 年 12 月発行

*Dynamics in Eurasian Languages III: —Diversity, Typology and Mixed language—*

Kobe City College of Nursing / Consortium for the Studies of Eurasian Languages

(December 31, 2019), pp. 21-48.

富山市立図書館山田文庫所蔵「朝鮮口聞書」解題ならびに翻刻

A bibliographical introduction to Chosenkuchigikigaki in Yamada  
Collection, Toyama City Public Library, with transliterated text

岸田 文隆

KISHIDA, Fumitaka

(大阪大学 Osaka University)

## 富山市立図書館山田文庫所蔵「朝鮮口聞書」解題ならびに翻刻

岸田 文隆

キーワード：かな書き朝鮮語、対馬、朝鮮語通詞、朝鮮語音韻史

### 0. 序

富山市立図書館には、著名な国語学者である山田孝雄の旧蔵書が収められているが、その中に江戸後期に対馬の朝鮮語通詞が編纂したと考えられる「朝鮮口聞書」という写本が存する。本書にはかなで表記された朝鮮語の文および語彙が収められており、朝鮮語音韻史の資料として注目される。本稿は、この資料を翻刻し、研究者の利用に供するとともに、その成立に関して初歩的な検討を加えたものである。

### 1. 「朝鮮口聞書」解題

国文学研究資料館が作成した「新日本古典籍総合データベース」<sup>1</sup>に基づき、「朝鮮口聞書」の書誌事項を略記すると、以下のとおりである。

「朝鮮口聞書（ちょうせんくちぎきがき）」（とびらに拠る）、江戸後期写本、44丁、1冊、12.7×17.3cm、横。外題なし、とびらに「宗猪三郎様通詞/東田多四良/小田伝左衛門/朝鮮口聞書」とある。富山市立図書館山田孝雄文庫所蔵、請求記号[W829.1 - チ - 722]

本書は、毎半葉6行程度で、日本語の語彙や文を提示し、それに対応する朝鮮語を日本のかなで表記してある。内容は、日本に漂着した朝鮮人漂流民との対話を想定したものと見られ、取り調べや護送などの場面ごとに関連する語彙や文を羅列したものととくである。また、本書39丁以降は、朝鮮の舩や家居、釜山絶影島（牧の嶋）の朝比奈神社等、朝鮮事情に関する説明文が羅列してある。

本書には序文・跋文等がなく、本書の祖本がいつ、どこで成立したのか明記したものがないが、とびらにある編纂者の名前や収録された文例の内容からある程度探ることが可能である。

<sup>1</sup> <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/029203035>（2019年2月3日閲覧）

まず、とびらにある宗猪三郎とは、第 11 代(1778 年～1785 年)対馬藩主の宗<sup>よしかつ</sup>義功のことであるが、天明 5 年(1785) 7 月 8 日に猪三郎が死去したあと、御家取り潰しを避けるため、弟の富寿が替え玉に立てられたので、弟の富寿、つまり第 12 代(1785 年～1812 年)藩主宗義功である可能性もある。

つぎに、通詞の東田多四良については、対馬藩朝鮮語通詞の任免記録である対馬宗家文書「通詞被召仕方・漂民迎送賄・町代官・御免札」(韓国国史編纂委員会所蔵、[記録類 5423]) に以下の記載がある。

明和八辛卯年(1771)十月廿一日

八人通詞 東田多四郎

右は安武平右衛門為代稽古通詞被召抱候

安永二癸巳年(1773)二月三日

稽古通詞 東田太四郎

右は和館勤番通詞吉松清右衛門為代被仰付候段 可被申渡候 以上

同年(1773)二月廿二日

稽古通詞 東田太四郎

右は和館勤番通詞吉松清右衛門為代被仰付 今度鰐浦へ漂着の朝鮮人十五人送賄通詞兼帯被差渡候間 可被申渡候 以上

安永三甲午年(1774)三月廿五日

通詞 吉村清右衛門

右は和館勤番東田太四郎為代被仰付候段 可被申渡旨 朝鮮方頭役へ相達尤役々へも可被得其意旨 廻達す

安永三甲午年(1774)十一月三日

稽古通詞 東田太四郎

右は矢木茂吉為代通詞に繰上げ被仰付候

安永四乙未年(1775)

同年(1775)二月十五日

稽古通詞 円嶋信蔵

右は東田太四郎別代官被仰付候付 為代通詞に繰上被仰付候

安永八己亥年(1779)五月四日

大通詞 小田常四郎

右は当亥年長崎勤番被仰付置候処 御用に付朝鮮え被召仕 長崎え被差越方  
及延引候付 此節勤番被差免候

町六拾人 東田太四郎

右は常四郎代り勤番の義 御算用方功者の人不被召仕候ては難叶筋有之候処  
太四郎義最初町参定官相勤 差引方得方に有之と相聞 殊一と先通詞をも相勤  
居候故 常四郎為代当亥年長崎勤番被仰付候 尤長崎勤番の義は通詞より被召  
仕候格に候へ共 此節は別段御用有之候故 太四郎義当分通詞助勤の形にて被  
差越候 依之来年よりは定式の通本通詞中より可被召仕候

右の通可被申渡候 以上

安永九庚子年(1780)十二月廿九日

稽古通詞 小田幾五郎

右は長崎勤番御雇通詞東田太四郎敏く交代前に付 為代被仰付候間 可被申  
渡候 以上

天明元辛丑年(1781)

同年(1781)九月廿四日

六拾人 東田多四郎

右は己亥年長崎勤番通詞被仰付置候処 此節就御用令中帰国居候処勤方大切  
に存 其上痛所も有之 難相勤候付 中帰国の俣交代被仰付被下候様願出 願  
の趣無余義相聞候付 可被差免候処 多四郎義性得実体気丈に有之 通弁は素  
り算用方功者に付 右の通被仰付置たる事に候 其上彼地の時体難渋差続居候  
得は 時体功者の人被差免 新役被差越候ては不相済品も有之候付 乍難義今  
暫可相勤候 就夫多四郎義今程の模様候へは交代の期も不相知事故 難義に  
可存候間 各別の訳を以 町代官又は通詞空有之節 直に可被仰付候 右両役  
共最前多年相勤居 是又功者の儀に付無相違可被召仕候間 尚又相属可令精勤  
候 此旨被申渡 空き有之節可被申出候 以上

天明元辛丑年(1781)十月四日

長崎御雇通詞 東田多四郎

右は先達て令中帰国居候処 此節又〃被差越候付 来る六日上船被仰付候  
此旨可被申渡候 已上

天明四甲辰年(1784)

同年(1784)閏正月十六日

六拾人 東田多四郎

右は去る己亥年長崎勤番通詞御雇被仰付置候処 是迄実体令精勤居候 右に  
付 天明元年丑年中帰国の節町代官通詞両役内空き有之節 可被仰付旨申渡置  
候 依之今般浅野最蔵為代通詞に被仰付候 尤前に稽古通詞より町代官転役被

仰付兩役共多年相勤功者の人と申 殊只今の通詞中よりは先輩の事故 通詞筆口に被仰付候条 猶又諸般心を相用 通詞役大切の意味深く令勘弁可相勤候

天明五乙巳年(1785)

同年(1785)二月十日

(通詞なるか可考) 稽古通詞 東田太四郎

右は長崎勤番通詞被仰付差渡置候処 痛所有之 御免の義願出 附紙を以左の通相達

見届紙面の趣無余義相聞候付 太四郎義長崎勤番被差免候 此旨可被申渡越候 猶又代の通詞人柄の義通弁方は素算筆共吟味の上可被申出候 右の通朝鮮方頭役え相達 可被得其意旨 御勘定奉行所へ相達

天明八戊申年(1788)

同年(1788)二月十九日

浅野屋最蔵

右は先年不埒の筋有之 通詞役召放置候処 最早年を経候付 前科差免 訳官に付御雇通詞申付置候 然処 元来通弁格別達者に有之 御用立候者と相聞候付 此節東田太四郎為代 通詞帰役申付候 尚又詞令熟達候様 可被申付候以上

寛政六甲寅年(1794)

同年(1794)二月廿四日

町代官 東田太四郎

右は議聘御用通弁引切申付置候付 町代官勤番此節差免候

また、対馬宗家文書「倭館館守日記」の案件別の分類総合索引である「分類事考」(国会図書館所蔵、[WA1-6-31])の「通詞并詞稽古」には、以下の記載がある。

一 八人通詞東田多四郎勤番通詞人少に付 助役申付候事 (明和) 同五戊子(1768)正月十日

一 八人通詞東田太四郎勤番助役申渡置候処 吉松清右衛門為代勤番仮役申渡候事 (明和) 同五戊子(1768)三月十八日

一 八人通詞東田太四郎勤番助役申渡候事 (明和) 同五戊子(1768)六月二日

一 八人通詞東田太四郎勤番仮役且助役相勤候に付 御充行被成下候事 (明和) 同五戊子(1768)十一月十一日

一 大通詞小田常四郎通詞朝野最蔵儀 議聘御用通弁被仰付置候所 此節引替  
 帰国被仰付候事

一 町代官東田太四郎通詞小田幾五郎右御用通弁被仰付候事 寛政六甲寅  
 (1794)正月十七日

以上の記録から、東田多四良は、1768年に八人通詞、1771年に稽古通詞、1774年に本通詞に昇進した対馬藩の朝鮮語通詞で、1794年頃まで長崎勤番通詞や町代官等を務めた人物であったことがわかる。

なお、本書とびらにあるもう一人の編纂者「小田伝左衛門」については、歴史記録類にその名を確認することができない。

以上のことから、本書の祖本が成立した時期は、編纂者の一人である東田多四良の活動した時期である、1760年頃から1800年頃に比定することができるであろう。

また、本書の祖本が成立した地については、東田多四良が活動した地域である、対馬、釜山倭館、長崎等の地が想定されるであろう。ただし、本書に現れる朝鮮人漂流民に向かって発するせりふの文例を子細に検討すると、対話の場面としては、長崎以外の九州あるいは本州のある地方が想定されていることがわかる。

[21b] 長崎え送る事 ○チヤググイ カチヤ (長崎へ行こう[引用者訳])

[22a] 対馬より返る事 : タイヤトシヤ チョセン カ (対馬から朝鮮へ行く[引用者訳])

[27b] 病死のしがい箱に入長崎へ送り候と云事 : ツコム コイヘ ニヨヲ  
 チヤククイヘ ホナノニ (死骸櫃に入れ長崎へ送るが[引用者訳])

[28b] 長崎より対馬へは舟にて帰し候事 : チヤククイシヤ タイマトノン  
 ハイロ カンタ (長崎から対馬へは舟で行く[引用者訳])

[31a] 爰本出立いたし 長崎へ十二日地にて着候と云事 : <sup>2</sup>

[34a] 少も気遣不申候事 是より城下に滞留させ いつ頃 長崎へ送り候といふ事 安心敷候へといふ事 : チヨコムト ニヨムニヨ マラ トグナイ  
 カチヤ チヤググイ カニ ニヨムニヨ マルラ (少しも心配するな、城下へ行こう、長崎へ行くから心配するな[引用者訳])

[35b] 是は舟にて海上より長崎へ送り候間 気遣無之事 : イコスン バタキ  
 ルロ チヤググイ カニ ニヨムニヨ マラ (これは海路より長崎へ行くから心配するな[引用者訳])

[36b] 近日長崎へ送候と云事 : スイ チヤククイ カンタ (すぐに長崎へ行く

<sup>2</sup> 当該例文については、資料原本において、和文のみあり、かな表記の朝鮮語文がない。以下、本論文においてかな表記の朝鮮語を示していないものは、すべて資料原本においてその部分を欠いているものである。

[引用者訳]

[37b] 長崎又は何国にても明日着といふ事 : ナイル カンダ (明日行く[引用者訳])

江戸時代、朝鮮から日本に漂着した漂流民を朝鮮へ送還する際、対馬に漂着した場合は対馬から直接朝鮮へ送り、その他の地域、すなわち九州や本州に漂着した場合は、まず長崎へ送ったあと、対馬を経由して朝鮮へ送ることになっていた。上の文例には、漂流民を長崎へ送るという内容が見えるので、対話の場面としては、九州あるいは本州のある地方が想定されていると考えられる。このことから、本書は、九州あるいは本州の朝鮮人漂流民の漂着地において用いられることを想定して編纂されたものと考えられる。

なお、本書は、対馬の朝鮮語通詞の東田多四良と小田伝左衛門が編纂した原本ではなく、後代に朝鮮語の知識がない者が筆写した写本と見られる。「対馬」に対する朝鮮語かな表記「タイマ」を「タイヤ」[22a]、「なき事」に対する朝鮮語かな表記「ヨフタ」を「ラフタ」[23b]、「なごりおしき事」に対する朝鮮語かな表記「ソブ」を「ムヤ」[31b]と書き誤った例が観察されるからである。

本書が言語資料として最も価値を有するのは、言うまでもなく、朝鮮語のかな表記である。江戸時代に対馬において編纂された朝鮮語かな表記の資料としては、享保14年(1729)に雨森芳洲が筆写した「全一道人」<sup>3</sup>や寛延3年(1750)に服部南郭が筆写した「朝鮮語訳」<sup>4</sup>がよく知られているが、それらの祖本の成立は18世紀初と見られる。本書の成立は上述のとおり大体18世紀末と推測されるので、それら既存の資料と対照することにより、その間の音声・音韻の歴史的変化を観察することができるものと期待されるのである。その一例として、朝鮮語の母音「・」に対するかな表記の例を観察してみよう。

朝鮮語の母音「・」は中期朝鮮語においては他の母音音素と区別される別個の音素としての地位を保っていたが、その後の言語変化により他の母音音素と融合し非音韻化した。ところで、江戸時代の朝鮮語学書にあらわれる朝鮮語のかな表記は、「・」が非音韻化していく過程をよくあらわしている。

宋敏(1986:138-140)は、「全一道人」のかな表記を分析して、第一音節に位置する母音「・」の非音韻化(主として母音「ト」への合流)の拡散過程は、先行する子音の音声資質による次のような環境順であったと推定した。

<sup>3</sup> 安田章(1964)を参照。

<sup>4</sup> 岸田文隆(2006; 2008; 2009a; 2009b; 2011)を参照。

- a. [-鼻音性, -舌端性, -粗擦性] 子音部類 (ㅎ, ㄱ, ㅌ)
- b. [-鼻音性, +舌端性, -粗擦性] 子音部類 (ㄷ, ㅌ)
- c. [-鼻音性, +舌端性, +粗擦性] 子音部類 (ㄴ, ㅍ)
- d. [+鼻音性, -舌端性, -粗擦性] 子音 (ㄹ)
- e. [+鼻音性, +舌端性, -粗擦性] 子音 (ㄴ)

すなわち、「全一道人」に見られる固有語第一音節に位置する母音「・」のかな表記は、a, b の環境下では主としてア段のかなで、c の環境下ではア段とオ段のかなで、そして d, e の環境下ではそのほとんどがオ段のかなでとらえられているのである。

「全一道人」

- ㅎ [9] ㅎ읍되 (します)    ㅎ람ムノイ
- ㄱ [18] ㄱ로되 (申さるゝは)    ㄱ로トイ
- ㅌ [49] ㅌ르미오 (明なるにて)    ㅌ\*ルクミヨ
- ㄷ [28] ㄷ라나 (逃げ)    ㄷラナ
- ㅌ [107] ㅌ지니 (肥ました)    ㅌルチニ
- ㄴ [17] ㄴ랑끼고 (愛し)    ㄴラグホコ
- ㅍ [47] ㅍ고 (帯び)    ㅍ\*コ
- [65] ㅍ로 (折々)    ㅍ\*ロ
- ㄹ [51] ㄹ춤내 (ついに)    ㄹツツムナイ
- ㄴ [42] ㄴ리지 아니끼더니 (降りさりけるに)    ㄴリチ アニハトニ

このようなかな表記の実態は、「全一道人」の編纂された 18 世紀初頭の時点において、d, e の環境下すなわち語頭鼻音下の母音「・」はなおも本来の音価を保っていたことを物語る。

「全一道人」と同時期に成立したと考えられる「朝鮮語訳」においても、語頭鼻音下の母音「・」はオ段のかなが当てられ、「全一道人」と同様の傾向を示している。

「朝鮮語訳」

- [1:12b] ㄴ즈라 (低し)    ㄴヅラ
- [1:39b] ㄴ치 (御面目)    ㄴツチ
- [1:41a] ㄴ과 (人と)    ㄴムクワ
- [1:5a] ㄹ즈시고 (御濟被成)    ㄹツサ\*シコ
- [1:41b] ㄹ므르 (心の俛に)    ㄹラムロ



ところで、これら2資料よりも後代の18世紀末に成立したと見られる本書のかな表記においては、母音「・」はa～eの環境においてどのようにあらわれるであろうか。調査したところ、以下のごとく、おおむねは、「全一道人」や「朝鮮語訳」と類似した傾向を示すものの、cの環境においてオ段でとらえられた例がなくすべてア段のかなが当てられており、dの環境下すなわち語頭鼻音下の母音「・」に対してオ段のみならずア段のかなが当てられた例もあらわれることが確認された。

「朝鮮口聞書」

- ㄱ [3a] 호노가 (言うか) ハノンガ  
 ㅋ [28b] 모을 (秋) カヲル  
 ㆁ [28b] 부름 (風) ハ\*ラム  
 ㆁ [13a] 달 (月) タル  
 ㄴ [26a] 사천 (四千) サセ\*ン  
 ㄹ [4a] 말 (馬) モル  
     [6a] 모을 (村) マヲル cf. 「全一道人」[47] 모을 (村) モヲル  
 ㄷ [18b] 낮 (低い) ノザ

以上の点から、本書の朝鮮語かな表記は、「全一道人」や「朝鮮語訳」よりも、母音「・」の非音韻化が一層進行した段階を示す資料として位置付けることができるであろう。

## 2. 「朝鮮口聞書」翻刻

凡例：

3点の濁点：「\*」を付す (例：ハ\*、セ\*)

連続記号 (〰)：下線を引く (例：クワ<sup>〰</sup>ンヲン)

なお、連続記号が続く場合には、その区切りを半角ピリオドで示す。

(例：チエ.ニエク)

ふりがな：{ } 内に示す (例：医員 {ウイヲン})

判読不明の文字：「■」で示す。

踊り字：「ㄹ」で示す。

翻刻：

[とびら]

宗猪三郎様通詞

東田多四良

小田伝左衛門

朝鮮口聞書

## [1a]

- 一 国■大守公の事 ○官員 {クワンラン}
- 一 役人の事 ○アゼン
- 一 医者の事 ○医員 {ウイラン}
- 一 外科の事 ○膏藥医術 {コヤクウイシユル}
- 一 朝夕食事の事 ○アツソ\*ムハ\*ブ●朝飯  
○セ\*ムシム●昼飯  
○セ\*ニエクハ\*ブ●夕飯  
●クウコトヲ モコト 云
- 一 肴の事 ○コキ

## [1b]

- 一 酒の事 ○スル
- 一 馳走の事 ○タイセ\*ブ
- 一 有る無しの事 ○イツタ●有  
○ヲブタ●無
- 一 病氣の事 ○へ\*グ ドロ
- 一 腫物痛所の事 ○フ\*ウロム
- 一 薬の事 ○ヤク

## [2a]

- 一 膏藥の事 ○コヤク
- 一 油藥事 ○キロムヤク
- 一 物かくか 否ぬかの事 ○クルシ スノンガ
- 一 国を問ふ事 ○ヲテ サラミランガ
- 一 いヶ様のわけにて参候かの事 ○ムスン イルロ ワツトンガ
- 一 何月何日に出候事 ○アモ タル メズンナル トナツトンガ

## [2b]

- 一 舟中にて難儀いたし候事 ○ハ\*タウイシヤ ウイタイハヤツトンガ
- 一 難風の事 ○モブスル ハ\*ラム
- 一 漁いたし候事 ○コキ サ\*フノンガ
- 一 衣類の事 ○ヲシ
- 一 頭巾の事 ○カムト
- 一 足袋の事 ○ホ\*セン

## [3a]

- 一 吉し悪しの事 ○チヨツタ●吉

○ナツフ\*タ●悪

- 一 名を問ふ事 ○イロミ モウシラ ハノンガ
- 一 歳をとふ事 ○ナヒ メツチヲンガ
- 一 くつの事 ○シン
- 一 飯の事 ○ハ\*ブ
- 一 汁の事 ○ク

[3b]

- 一 さいの事 ○ハ\*ンサ\*ン
- 一 男女の事 ○サナハイ●男  
○ケチブ●女
- 一 きせるの事 ○タンバタイ
- 一 たばこの事 ○タンバ
- 一 たはこ入の事 ○サムジ
- 一 きせるさしの事 ○タンバタイ ツモニ

[4a]

- 一 巾着の事 ○ツモニ
- 一 馬の事 ○モル
- 一 駕籠の事 ○ノリコイ
- 一 天気快晴の事 ○ナリ チヨワ
- 一 雨天の事 ○ヒ\* ヲンダ
- 一 雪降事 ○ドニ ヲンタ

[4b]

- 一 東西南北 {トグ セ ナム フ\*ク} の事
- 一 火の事 ○フ\*ル
- 一 筆墨のこと ○フ\*シ ●筆  
○モク ●墨
- 一 切れ物の事 ○カル
- 一 礼儀の事 ○インソ
- 一 髪結ふ事 ○モリ ヒ\*ソ

[5a]

- 一 金銀錢の事 ○クム ●金  
○ウン ●銀  
○トン ●錢
- 一 米の事 ○サル
- 一 笠の事 ○カツ

- 一 いやおふの事 ○アニ ●いや  
○ヲルタ ●を //
- 一 夜具の事 ○ニブル
- 一 ねごごの事 ○サ\*リ

## [5b]

- 一 ねる事 ○ドラ
- 一 おきる事 ○ニラナ
- 一 枕の事 ○へ\*カイ
- 一 急く事 ○ヲセ
- 一 いそかぬ事 ○チヨヨギ
- 一 しかる事 ○マルラ

## [6a]

- 一 願事 ○ヒ\*ロ
- 一 宿の事 ○チブ
- 一 道の里数の事 ○シブニ ●壹里  
○ハ\*クニ ●拾里  
○セルリ ●百里
- 一 城下の事 ○クワンガ マヲル
- 一 いなかの事 ○ソン マヲル
- 一 馬つぎの事 ○エグマ

## [6b]

- 一 なる ならんの事 ○トヤ ●成  
○アニ ●不成
- 一 火はちの事 ○フワロ
- 一 すみの事 ○スツチ
- 一 人の事 ○サラム
- 一 塩の事 ○ソコム
- 一 薪の事 ○ナモ

## [7a]

- 一 味噌の事 ○チヤグ
- 一 醤油の事 ○カンヂヤグ
- 一 すの事 ○ゾ
- 一 大根の事 ○ムスイ
- 一 さじの事 ○シユツクワラ

一 油の事 ○キロム

## [7b]

- 一 物をくれる事 ○ツンダ
- 一 もろふ事 ○ツヲツタ
- 一 いらぬ事 ○マタ
- 一 かたき事 ○チルクイタ
- 一 やわらかなる事 ○ホ\*トラブタ
- 一 門の事 ○ムン

## [8a]

- 一 是より外へ出るなと云事 ○イ ハ\*ツクイ ナチ マルラ
- 一 是より外へ出よと云事 ○ナカチャ
- 一 行か行ぬかの事 ○カノンガ アニ カノンカ
- 一 気分吉し悪しの事 ○クイウンイ チヨランカ
- 一 火の元念の入れ候事 ○フ\*ル ソ\*シム ハソ
- 一 人をよぶ事 ○フ\*ルラ

## [8b]

- 一 人をかへる事 ○トラ カチヤ
- 一 かへらぬ事 ○アニ カチヤ
- 一 待てといふ事 ○ケ イツソ
- 一 茶はんの事 ○サ\*ツホ\*ウ
- 一 茶の事 ○サ\*
- 一 水の事 ○ムル

## [9a]

- 一 湯の事 ○トブン ムル
- 一 呑事 ○モクチヤ
- 一 物とる事 ○ハ\*タ
- 一 同とらぬ事 ○アニ ハ\*タ
- 一 家の事 ○チブ
- 一 櫛の事 ○ヒ\*ツ

## [9b]

- 一 酒呑む事 ○スル モクチヤ
- 一 呑ぬ事 ○スル アニ モクチヤ
- 一 竹木の事 ○タイ ●竹  
○ナモ ●木

- 一 大きき事 ○クルク ●大ひ事  
○チヤクタ ●小き事
- 一 長がみじかの事 ○キルタ ●長き事  
○チヤロタ ●経<sup>5</sup>き事
- 一 糸の事 ○シル

## [10a]

- 一 針の事 ○ハ\*ノル
- 一 わからぬ事 ○アラ トツチ モツハヤ
- 一 わかる事 ○アラツタ
- 一 歌の事 ○ノライ
- 一 おどりの事 ○ツム
- 一 ふへの事 ○トグシヨ

## [10b]

- 一 大こ {タイコ} の事 ○フ\*ク
- 一 何時といふ事 ○アツソ\*ム ●朝  
○ナツ ●昼  
○チエ.ニエク ●夕
- 一 夜の明る事 ○ハム サヤ
- 一 難有事 ○カムシヤ
- 一 食事くうかの事 ○ハブ モグノンガ
- 一 同くわぬかの事 ○ハブ アニ モグノンガ

## [11a]

- 一 潮の事 ○ソコム ブル
- 一 エル 十
- 一 スムル 二十
- 一 セルン 三十
- 一 マホン 四十
- 一 スイン 五十

## [11b]

- 一 エシユン 六十
- 一 ギレン 七十
- 一 ヨトン 八十
- 一 アホン 九十

---

<sup>5</sup> 「短」とあるべきか。

- 一 イルハ\*ク 百
- 一 道の事 ○キル

## [12a]

- 一 何ん里と云事 ○メンニ
- 一 けんの事 ○カン
- 一 壺尺の事 ○セ\*ク
- 一 寸の事 ○ソン
- 一 寺の事 ○デル
- 一 社の事 ○シンタグ

## [12b]

- 一 家の事 ○チブ
- 一 何人んと云事 ○メツチ
- 一 生死の事 ○サラ ●生  
○ツクタ ●死
- 一 よき事 ○チヨツタ
- 一 人の事 ○サラム
- 一 頭の事 ○モ

## [13a]

- 一 首の事 ○モク
- 一 髪の毛の事 ○モリトル
- 一 月の事 ○タル
- 一 鼻の事 ○コ
- 一 口の事 ○イブ
- 一 耳の事 ○クイ

## [13b]

- 一 咽の事 ○モク
- 一 肩の事 ○ヲツカイ
- 一 背の事 ○トグ
- 一 胸の事 ○カスム
- 一 腹の事 ○ハイ
- 一 こしの事 ○ホリ

## [14a]

- 一 足の事 ○タル
- 一 膝の事 ○ムロブ

- 一 足首の事 ○ハ\*ル
- 一 爪の事 : トブ
- 一 男女陰門の事 ○ソ\*ツ ●男根  
○シブ ●玉門
- 一 老人の事 ○ノイン

## [14b]

- 一 中年の事 ○シヨネン
- 一 小児の事 ○アフイ
- 一 腰し物の事 ○ハント
- 一 小刀の事 ○カル
- 一 切れ物の事 ○同
- 一 糸の事 ○シル

## [15a]

- 一 縫う事 ○ハ\*ノジル
- 一 物のそんづる事 ○シヤグハヤ
- 一 同 わからぬ事 ○アチ モツハヤ
- 一 神儒仏の事 ○クイシン ●神  
○セニホイ ●儒  
○フツチェ ●仏
- 一 惣髮の事
- 一 髮結事 ○モリ ヒ\*ツキヨ

## [15b]

- 一 見苦しき事 ○ホ\*キ スルタ
- 一 出家の事 ○チュグ
- 一 魚の事 ○コキ
- 一 鳥の事 ○カマクイ
- 一 鹿の事 ○サソム
- 一 兎の事 ○トツキ

## [16a]

- 一 犬の事 ○カイ
- 一 熊の事 ○コム
- 一 馬の事 ○モル
- 一 牛の事 ○シヨ
- 一 鶏の事 ○タルク
- 一 同 卵の事 ○アリ



## [16b]

- 一 家猪 {フタ} の事 ○トヤチ
- 一 書物つの事 ○サ\*ク
- 一 同 よむ事 ○ニカ
- 一 よめぬ事 ○モルラ
- 一 早き事 ○ヲセ
- 一 をそ事 ○トテ

## [17a]

- 一 礼儀の事 ○インソ
- 一 じきの事 ○サヤグ
- 一 兄弟の事 ○ヘグ ●兄  
○アラ ●弟
- 一 あね妹の事 ○コンド ●姉  
○アラド ●妹
- 一 親の事 ○ヲホイ
- 一 子の事 ○アトル

## [17b]

- 一 女房の事 ○ケチブ
- 一 大小便の事 ○ヲゾム ●大<sup>6</sup>のほう  
○トク ●小<sup>7</sup>の方
- 一 きれいなる事 ○セ\*グハタ
- 一 ざまくなる事 ○トロブタ
- 一 火燈す事 ○フル クコ
- 一 くらき事 ○トブタ

## [18a]

- 一 打つ事 ○チタ
- 一 うたぬ事 ○チリマラ
- 一 いやと云事 ○アニ
- 一 すく事 ○ツルコブタ
- 一 米の事 ○サル
- 一 高き事 ○ノツブタ

---

<sup>6</sup> 「小」とあるべし。

<sup>7</sup> 「大」とあるべし。

## [18b]

- 一 ひくき事 ○ノザ
- 一 高直なる事 ○ビツソ
- 一 下直の事 ○ホルタ
- 一 寐所の事 ○シンハグ
- 一 寒き事 ○チブタ
- 一 あつき事 ○トフタ

## [19a]

- 一 夜具の事 ○ヨニブ
- 一 くつの事 ○シン
- 一 せわになる事 ○ベハタ
- 一 馬の事 ○モル
- 一 かごの事 ○ノリマイ
- 一 枕の事 ○ベカイ

## [19b]

- 一 出る事 ○ナヤ
- 一 でぬ事 ○アニ カ
- 一 来る事 ○ワツタ
- 一 帰る事 ○トラカタ
- 一 死体の事 ○ツコム
- 一 たて横の事 ○チヤグ ●長  
○クワグ ●横

## [20a]

- 一 入る事 ○トロ
- 一 入れぬ事 ○アニ トロ
- 一 取帰る事 ○カチヨ カ
- 一 同 ならぬ事 ○アニ カチヨ カ
- 一 はつとの事 ○クムハヤ
- 一 蠟燭の事 ○チヨ

## [20b]

- 一 火箸の事 ○ブルチエ
- 一 うれしき事 ○バンカブタ
- 一 かなしき事 ○クンシム
- 一 なく事 ○ウロ

- 一 はかと云事 ○バサク
- 一 りこうと云事 ○スルコブタ

## [21a]

- 一 東西南北の事 ○トグ セ ナン ボク
- 一 十千 ○シカン
- 一 十二支
- 一 時の事 ○シ
- 一 御上より物下さる事 ○ツシタ
- 一 茶わんの事 ○ザツボ

## [21b]

- 一 何月何日の事 ○アモタル  
○アモナル
- 一 雨天の事 ○ヒ ヲンタ
- 一 晴天の事 ○ナル チヨツタ
- 一 書の事 ○シエ
- 一 書物の事 ○ザク
- 一 長崎え送る事 ○チヤググイ  
○カチャ

## [22a]

- 一 対馬より返る {カヘルか トフルか} 事 : タイヤ<sup>8</sup>トシヤ チヨセ  
ン カ

## [22b]

- 先刻の事 : アツカ
- 後刻の事 : イツタカ
- 礼する事 : ■ルハヤ
- 酒す事 : スル
- 呑まぬ事 : アニ モカ
- 難儀なる事 : クツキヨ

## [23a]

- 腹痛の事 : ホクトグ
- 足痛の事 : ハ\*ル アツハ\*
- 頭痛の事 : モリ アツハ\*

---

<sup>8</sup> 「マ」とあるべし。

病なをりたる事 : ナア  
 薬吞めと云事 : ヤク モカラ  
 同 吞むなと云事 : モクチ マラ

## [23b]

痛所へ針立る事 : チム マサ  
 血なき事 : ビ ラ<sup>9</sup>フタ  
 膿なき事 : コロム ラ<sup>10</sup>ブタ  
 明日血取て遣すと云事 : ナイル ビ ナヤ ツマ  
 何ん人んと云事 : メツチ  
 来る事 : ワツタ

## [24a]

帰る事 : トラ カンタ  
 舟の事 : バイ  
 ろの事 : ノイ  
 ひま取 {イ} する事 : セニエンハヤ  
 まてといふ事 : ケ イツチヤ  
 釣針の事 : ナツキ

## [24b]

あみの事 : クムル  
 米なき事 : サル ヲブタ  
 かつゑる事 : ヘヤ  
 肴の事 : コキ  
 多葉粉すう事 : タンバ モカ  
 すはぬ事 : アニ モカ

## [25a]

早く馬にのれと云事 : ヲセ モル タチヤ  
 日暮る事 : ナリ セムロ  
 寒き事 : チブタ  
 あつき事 : トブタ  
 物を見せいと云事 : ボチヤ  
 すべて売物直段を問事 : カブシ ヲルマナ ハノンガ

---

<sup>9</sup> 「ヲ」とあるべし。

<sup>10</sup> 「ヲ」とあるべし。

## [25b]

歌をうたへと云事 : ノライ ブルチャ  
 笛吹けと云事 : トグシヨ フルラ  
 早く寐よと云事 : ヲセ ドブラ  
 療治する三<sup>11</sup>人つ<sup>12</sup>と云事 : ハナシク ヲナラ  
 無礼なる事 : インソ モルラ  
 人をよぶ事 : フロラ

## [26a]

人おらぬ事 : ヲフタ  
 千より万の事 : イルセ\*ン イセ\*ン サムセ\*ン サセ\*ン ヲセ\*ン  
 ニクセ\*ン チルセ\*ン ハルセ\*ン クセ\*ン イルマン  
 東西南北 : トグ セ ナン ボク  
 先刻の事 : アツカ  
 後刻の事 : イツタカ  
 ひま入る事 : ゼニエンハタ

## [26b]

ひま入ぬ事 : アニ ゼニエンハタ

## [27a]

此所より外へ出不申と云事 : イ バツク ナカチ マルラ  
 出候へは とりひしき事 : ナカミヨン タソリラ  
 見物人故 人をおい不申様と云事 : クツ ホ\*ラ ヲノン サラミニ  
 クリ マルラ  
 若し 人けがいたし候へば いましめ 朝鮮えかへし不申と云事 : ホク  
 サラミ シヤクハミヨン チヨセンウイ ホナイチ アニ<sup>11</sup>ラ  
 日本 何 朝鮮 何と問ふ事 : イルホ\*ン ムヲシ チヨセン ムヲシ

## [27b]

きれいにいたし居候様にといふ事 : トロブチ アニツカイ ハヤラ  
 病死のしがい 箱に入 長崎へ送り候と云事 : ツコム コイヘ ニヨヲ  
 チヤクタイヘ ホナノニ  
 寺におき候事 : ゼルイ トヲ  
 此所の戸障子 明不申様 云事 : ヨクイ ムン エチ マルラ  
 御上より衣類足袋等被下候事 : サツトクイシヤ ヲツ ホ\*セセン

11 「ニ 一」すなわち「に 一」とあるべし。

12 「い」と読むべきか。

## [28a]

難有と礼申事 : カムギヨク<sup>13</sup>ハヤ  
 紙殊の外大切の物故 余分つかい不申様にと云事 : チヨクホイ クイハ  
 ン コシニ コンニ スチ マルラ  
 たはこ 朝晩より外 遣不申と云事 : タンハ アツソム セニエク ハ  
 ツクイ アニ ツンタ  
 能きたはこの事 : タンバ チヨツタ  
 悪き多葉この事 : イ タンバ モン モカ

## [28b]

春 : ボム  
 夏 : ニエロム  
 秋 : カヲル  
 冬 : ケヲル  
 風 : ハ\*ラム  
 雨 : ヒ\*  
 雪 : トン  
 霜 : ソル  
 雪ふるかと問事 : トンニ ラノンガ  
 長崎より対馬へは舟にて帰し候事 : チヤククイシヤ タイマトノン ハ  
 イロ カンタ  
 朝鮮へ舟にて帰候事 : チヨセンウイ ハイロ カンダ  
 海上の事 : ハタグ

## [29a]

陸地の事 : ムツチ  
 銭 何文にて かい候事 : トンウロ サチヤ  
 大切にいたし候様申聞す事 : ホメンイ アチ マラ  
 何事にもおごり候へば 一切かまい不申と云事 :  
 大小便所有候間 右の所へ行候様 申聞す事 :  
 泣く事 : ウロ

## [29b]

笑ふ事 : ウソ  
 此人はと云事 : イ サラムン  
 あの人はと云事 : ゼ サラムン

---

<sup>13</sup> 「ギヨク」とあるべし。

何くはなきと云事 :  
 歌をうたへと云事 : ノライ フロラ  
 珍らしきといふ事 : クイハタ

## [30a]

此人 聞に来たと云事 :  
 弓鑓の事 : フワル サグ  
 鉄砲の事 : チヨツチヨク  
 物をかむる事 :  
 たれ〃〃にあいたいと云事 :  
 留守と云事 : チブイ ヲフタ

## [30b]

今少しまでと云事 : ザ<sup>14</sup>ム キドリラ  
 何にても朝昼晩より外遣し不申といふ事 :  
 何程申候ても相成不申と云事 :  
 細ま事いふなと云事 :  
 何〃朝鮮にも有かと問事 :

## [31a]

なきかと云事 : ヲフノンガ  
 物見せよと云事 : ホ\*チヤ  
 是より昼飯の宿 晩泊りの宿 里数いくら有と云事 :  
 爰本出立いたし 長崎へ十二日地にて着候と云事 :

## [31b]

肴にても何にても焼と云事 :  
 焼ぬと云事 :  
 段〃世話になり 恩忘れ難しと 礼云事 :  
 なごりおしき事 : ソブ〃〃ム<sup>15</sup>ヤ  
 暇乞の事 : ハチク  
 無事にて暮せと云事 : ムソイ チナイラ

## [32a]

酒飲すと云事 : スル モカラ  
 餅くわすと云事 : トク モカラ

---

<sup>14</sup> あるいは、「サ\*」か。

<sup>15</sup> 「ハ」とあるべし。

さとうの事 :セルタグ

朝鮮人漁舟漂着の時 始て出合候時分 問候事  
其方共はいか様の様子にて参り候か :ドホンノン ヲツチ ワンノンカ

[32b]

漁のため罷出 俄に風起り 吹流され 数日山も不見へ居候処 何と申  
所かは不存 漂着仕候といふ :  
何日頃 朝鮮を罷出候か :ランゾイ チョセンウル トナツトンカ  
何日に出船いたし 船中十日も居申候と云 :  
人数 何人にて罷出候か :サラム メツチランガ  
或は人数十人にて罷出候処

[33a]

内 二人は 或は病死にても うへ死にても いたし候とことふ :  
朝鮮国の何村といふ所の者か :チヨセン ヲラ<sup>16</sup> サラミランガ  
名は何といふか :  
○何<sup>17</sup>といふ :  
歳は何歳かと問 :ナヒ メツチランガ  
此人は何歳 私は何歳と答 :

[33b]

とれか舟頭か :トイカ サコグインガ  
私か舟頭といふ事 :  
此病人はいか様の病気か :ベクドン サラム ヲツタン ベクインガ  
或何病と答 :  
私医者にて候間 療治いたし呉候様に申事 :ナノン ウイシユルイニ  
ベグ コツチヨ ツマ  
其時 薬にてものむといふかの事 :

[34a]

爰にては療治なり不申間 宿よりつれ行といふ事 :エシヤノン ヘグ  
コツチキ ヲリヨラン<sup>17</sup> チブイ カチャ  
行く 行ぬといふ事 :  
少も気遣不申候事 是より城下に滞留させ いつ頃 長崎へ送り候とい  
ふ事 安心致候へといふ事 :チヨコムト ニヨムニヨ マラ トグナイ  
カチャ チャグクイ カニ ニヨムニヨ マルラ

<sup>16</sup> 「テ」とあるべし。

<sup>17</sup> 「ニ」とあるべし。



[34b]

寒気強き故 火にても呉候かたとふ事 :ナリ チウニ フル タルラ  
 火をたき あたらせ候様に申事  
 食事にかつへ候はリ 飯にても酒にても呉候かと問事 :シジヤクハコト  
 シ ハブイナ スルイナ スマ  
 飯くわせ候様に申事 :ハブ モクチャ

[35a]

酒のませ呉候様に申事 :スル モクチャ  
 是より城下へ連行候間 支度等いたし候といふ事 :エシヤ トグノイ  
 カニ カチャ  
 舟あみ等置候 右の舟あみはいか様にいたし呉候やといふ事 :

[35b]

是は舟にて海上より長崎へ送り候間 気遣無之事 :イコスシ バタキル  
 ロ チヤグクイ カニ ニヨムニヨ マラ  
 馬にて連行候間 用心いたし 落るなといふ事 :マルロ カニ ソシム  
 ハラ  
 駕籠に乗るかといふ事 :ノルマイ タノンガ  
 駕籠殊の外ちさく 日本には

[36a]

是よりふとき駕籠無き由 申事 :  
 駕籠殊の外せまく 乗り苦しくといふ事 :  
 旅宿に着候といふ事 :サムイ ワツタ  
 夜具等呉候間 寐候様にといふ事 :ヨニブ ツニ トヲラ

[36b]

明日参候間 ろうせき致候へは 御上へ申上 いましめ候といふ事 :  
 役人参候間 礼儀致候様に申事 :ソイム ジヤ ワシニ インソハラ  
 近日長崎へ送候と云事 :スイ チヤクイ カンタ  
 私連行候といふ事 :ナイ タリヨ カチャ  
 此所山中にて肴一切なく候間

[37a]

致了簡 食事たへ候様 申事 :  
 舟に乗るといふ事 :ハイ タコ カチャ  
 明日は早く出立いたし不申ては遠道故暮ると云事 :

早く起 急候様にといふ事 :  
喧嘩又は騒動致候時 取ひしき候事 :

[37b]

長崎又は何国にても明日着といふ事 : ナイル カンダ  
笠着候事 : カツ スチャ  
頭巾かぶり候事 : カムト スチャ  
右見せ候といふ事 : ホチヤ  
味甘き 苦き 辛き事 : タダ スタ マイブタ

[38a]

気分あしきかと問事 : モミ アツフンガ  
すら事 いふと云事 : コウツンマル  
正直にいふて聞せと云事 : ラ<sup>18</sup>ロンマル ハヤラ  
日本にては何<sup>レ</sup>は嫌ふと云事 : イルホンシヤノン クイハタ  
すくと云事 : ツルキヨ  
手足あらへといふ事 : ソン シソラ

[38b]

是は何<sup>レ</sup>と云事 : イユツ ムヲシ  
此所に置候間 左様に心得候へといふ事 : ヨクイ トニ クリ アララ

[39a]

一 舂の事 升長てにいたし 日本の壺舂の所 三合三勺升也 米余分  
有処にて 山ばかりにする 升かけなし  
一 朝比奈の事 朝鮮死候もの也 此已前迄 年来官人とも右墓 {ハカ}  
道ばたに有之候処を通行の節 こし馬等にて通行の節は 右の所にて落  
候由にて 人<sup>レ</sup>あやしみ居候処 老人等申伝にて朝比奈の墓の由相知  
早速牧の嶋へ 祭りかへ 社等建候由 是よりは

[39b]

落馬等無きよし 右牧の嶋は馬居申候由 対州よりの役人中参り被居候  
処を くわんといふ 此所より右の嶋へは壺式町も御座候由 放れ嶋な  
り  
一 朝鮮人居の事  
都て家は 日本の在家の如くなり 高官の者は 又格別也 右ふさんか  
いに 対州よりの禄被下候朝鮮人式人居候由 対州の御用等承候由 此

<sup>18</sup> 「ヲ」とあるべし。

## 家等

[40a]

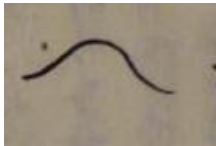
客対の間は 板敷の由 右の人居間は 四畳半茶座敷の如く まはりを能くかこい 床下は都てねりべいの由 後より床下へ口有 わら等焚煙りを床下へ つめ置よし 是は寒中おもに致候由 夫ゆへ余程暖かなるよし也

一 日本よりは寒気強き所也 うしほ等しみ候由 舟の碇綱海へつけ置候を 上げ候時は しみ候て 帆柱より

[40b]

高く綱上り候由

一 山は日本の山とは違ひ けはしくなく 丸く不残裾の広かり候由 大木等はなく 都てかや山也 作りもの等は右の山をひくき作り候由 山の形は



此通りなり

皆ひくき山なり

一 漂着の人とも 帰り候時は 右対馬より

[41a]

禄被下候人へ渡し候由 舟有之候ものは 舟にてかへり 舟無きものは 陸よりかへる 是もたん〃〃口を能聞た〃きはらひのよしと含致 宿所へかへり候由

一 百年も式百年も已前等 崩御の帝王の祥忌日には国忌と申 都て高声 市立 買もの等一切不致候由 乍去 一年に祥月計一度の祭也 礼式日本より強し 且又匹夫たり

[41b]

とも 三年のもはげんじうなり 年始盆の祭りごとなし 八月十五日大祭也 都て 一年に一度 祥月を祭候由 万〃歳の末迄 祭るなり 右

の日には 墓所へ参り 魚肉ぶた等持参り 喰呑いたし 涙を流し し  
うたんす 是礼式也 朝鮮ふさんかいより 都へ十二日地程有り 右都  
より本唐へ里数同様  
一 帝王の名 あざなの字は 名には

[42a]

つけず 通り字あれば 字を作り よみをかへるといふ

[42b]

### 参考文献

- 岸田文隆(2006) 「早稲田大学服部文庫所蔵の「朝鮮語訳」について —  
「隣語大方」との比較—, 『朝鮮学報』199/200, 天理: 朝鮮学会
- \_\_\_\_\_ (2008) 「早稲田大学服部文庫所蔵『朝鮮語訳』の朝鮮語かな表記  
について(その1: 子音について)」, *Dynamics in Eurasian Languages*,  
神戸市看護大学人文科学領域
- \_\_\_\_\_ (2009a) 「語学書と歴史記録 ——早稲田大学服部文庫所蔵「朝鮮  
語訳」と対馬宗家文書との照合」, 『朝鮮半島のことばと社会——油谷幸  
利先生還暦記念論文集』, 東京: 明石書店
- \_\_\_\_\_ (2009b) 「資料翻字 早稲田大学服部文庫所蔵「朝鮮語訳」対話篇」,  
『朝鮮語史研究』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- \_\_\_\_\_ (2011) 「「朝鮮語訳」にあらわれた別差上京をめぐる対話の日付に  
ついて —対馬宗家文書 山川治五右衛門「朝鮮御代官記録」に基づいて  
—」, 『ユーラシア諸言語の動態(Ⅱ) —多重言語使用域の言語—』, 神  
戸市看護大学/ユーラシア言語研究コンソーシアム
- 安田章(1964) 『全一道人の研究』, 京都: 京都大学国文学会
- 宋敏(1986) 『前期近代国語 音韻論 研究』, 서울: 塔出版社

【謝辞】 山田文庫所蔵「朝鮮口聞書」の閲覧調査を許可して下さった富山市立図書館に深甚の謝意を表します。なお、本研究は JSPS 科研費 JP16H03417、JP17K02962、JP17K02725 の助成を受けたものです。

도야마(富山)시립도서관 야마다(山田)문고 소장

「조선쿠치기키가키(朝鮮口聞書)」해제 및 번각

岸田 文隆 (KISHIDA, Fumitaka)

(大阪大学)

도야마(富山)시립도서관에는 저명한 일본어학자인 야마다 요시오(山田孝雄)의 구장서가 소장되어 있지만 그 중에 에도(江戸)시대 후기에 대마도 조선어통사가 편찬한 것으로 생각되는 「조선쿠치기키가키(朝鮮口聞書)」라는 필사본이 있다. 이 책에는 일본의 가나문자로 표기된 한국어 문장과 어휘가 수록되어 있어서 한국어 음운사 자료로서 주목된다. 본고는 이 자료를 번각해서 학계에 제공함과 동시에 이 책에 대한 초보적인 문헌학적 검토를 실시한 것이다. 이 책의 편찬자 쓰카다 다시로(束田多四良)는 1760 년경부터 1800 년경까지 대마도와 부산 왜관(倭館), 나가사키(長崎) 등에서 활동했던 대마번의 조선어통사이며, 이 책이 성립된 시기와 지역 역시 그가 활동했던 시기와 지역과 일치하는 것으로 보인다. 단 이 책에 나오는 한국인 표류민을 대상으로 하는 대사 예문을 검토해 보면 대화 장면으로서 구주(九州) 아니면 본주(本州)의 모지역이 상정되어 있는 것으로 추측되며, 이 책은 그러한 지역의 한국인 표류민 표착지에서 사용하는 것을 목적으로 하여 편찬된 것으로 생각된다.

이 책에 수록된 한국어 가나표기를 18 세기 초에 성립된 한국어 가나표기 자료인 「전일도인(全一道人)」, 「조선어역(朝鮮語訳)」과 대조함으로써 그 간의 한국어 음성, 음운의 역사적 변화 양상을 파악할 수가 있다. 예를 들어 한국어 모음「·」에 대한 가나표기를 관찰해 보면 이 책의 가나표기는 「전일도인」, 「조선어역」보다 모음「·」의 비음운화가 더 진행된 모습을 보여주고 있다.